

『墓の彼方からの回想』 結語

シャトーブリアン
小 野 潮 訳

一八一一年一〇月、帝政期に当時、政治的にはナポレオンと対立し、もっぱら文筆の生活を送っていたシャトーブリアンによって書き始められ、一八一四年の第一次王政復古、一八一五年のナポレオンの百日天下、第二次王政復古、一八三〇年の七月革命を経て、その後の、シャトーブリアンがブルジョア王政である七月王政への断固たる反対派、ブルボン正統王朝支持派として過ごした七月王政期まで、ときにかなり長期にわたる間歇期を経て、一八四一年まで書き継がれた『墓の彼方からの回想』の執筆期間はほぼ三十年にわたる。

そこで扱われている時代は旧体制の時代から、一八四八年の二月革命の直前に至るフランスの歴史の激動期に当たる。しかもその語り手は、王政復古期には、ロンドン、ベルリン、ローマ駐在のフランス大使を務め、外務大臣を務め、また権力の座にないときにも、王党派ではあるものの、時の内閣に対抗する勢力の一方の旗頭と目されることの多かった人物であり、そのうえ、その政論活動により、時代に大きな影響力をふるい、なおかつユゴー、デュマを始めとする当時の若き文学者たちから圧倒的尊崇を受けた人物である。

その彼が、自分の人生を振り返るとともに、その長大な回想録の執筆過

程をも振り返りながら記したのが、今回訳出した結語部分ということになる。

底本として用いたのはジャン＝クロード・ベルシエ校訂によるクラシック・ガルニエ版 Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-Tombe*, Tome IV, Ed. de J.-C. Berchet, Classiques Garnier Multimédia, 1998 である。訳注中で (JCB) と記載してあるものは同版のベルシエによる注を参考に行っている。また (JPC) と記載してゐるのはジャン＝ポール・クレマンによる Gallimard 社の Quarto 版の注を参考に行っている。

結 語

一八四一年九月二五日

私はこの『回想録』をヴァレ＝オ＝ルー¹⁾で一八一一年一〇月四日に書き始めた。これに加筆を加えながら、一八四一年九月二五日にパリでその読み返しを終えようとしている。次々と起きる革命の只中、私の人生を襲ったあらゆる浮き沈みの只中で、今ではすでに公刊されている著作を書きながら、この回想録を書くためにひそかにペンを走らせて二十九年十一月二十一日になる。私の手はこの仕事にも飽きた。私の手が、自分のさまざまな考えに働きかけなかったなどということがありうるだろうか。私の考えはまったく変化しなかったし、人生を歩み始めた当初と変わらず私の考えは生き生きしていると感じている。三十年にわたるこの仕事に、全般的な結論を与えようという意図が私にはあった。何度も言ったように、自分がそこに入ったとき世界がどのようなだったか、自分がそこを去ろうとしている現在、世界がどのような状態であるのかを語るつもりだった。だが、砂時計は私の前にある。私には、かつて水夫たちが難破のおりに波のあいだから現れると思込んでいた手が見える。その手が私に、記述を短くせよと合図を送ってくる。だから、大事なことは何も書き落とさないようにしながら、記述は簡略にしよう。

第四二巻第一〇章²⁾

私の人生に先立つ歴史的できごと——摂政期から一七九三年まで

- 1) シャトブリアンがこの回想録の執筆を始めたのはナポレオン帝政期の一八一一年であり、このとき彼はパリ南郊のヴァレ＝オ＝ルーに居住していた。
- 2) 『墓の彼方からの回想』の巻の設定、章立ては版によって異同が見られる。いくつかの版では「結語」以下を新たな巻とし、ここで四二巻第一〇章とし

ルイ十四世が死んだ。ルイ十五世が未成年のあいだオルレアン公爵³⁾が摂政を務めた。セラマール⁴⁾の陰謀の結果として、スペインとの戦争が勃発した。アルベローニが失脚し、平和が戻った⁵⁾。ルイ十五世は一七二三年二月一五日に成年に達した。摂政はその十ヵ月後に倒れた。摂政はすでに自分の壞疽をフランスに感染させており、デュボワ⁶⁾をフェヌロン⁷⁾の後任とし、ロー⁸⁾に高い地位を与えていた。ブルボン公爵⁹⁾がルイ十五世

ている章を、第四三巻第一章とし、以下の章を二章、三章という形で章番号を振っている。本校の底本としたジャン＝クロード・ベルシェによるクラシク・ガルニエの版は、シャトーブリアン¹⁰⁾の死の直後、『プレス』誌によって、連載の形で掲載された形ではなく、残された原稿になるべく忠実な形で『墓の彼方からの回想』を再現しようとしている。本校で記された巻、章の数字はベルシェによるものを踏襲している。

- 3) フィリップ二世、オルレアン公爵（1674-1825）。ルイ十四世の弟フィリップの孫で、ルイ十五世が未成年のあいだ 1715 年から 1723 年まで摂政を務める。
- 4) アントニオ・ジュディーセ・セラマール（1657-1733）。摂政期の駐仏スペイン大使。（JPC）
- 5) 駐仏スペイン大使セラマールがその上司である大臣アルベローニ枢機卿の指示に従い、メヌ公爵夫妻と共謀してたくらんだこの陰謀の目的は、摂政を罷免させ、その代りに摂政の従弟でありスペイン国王であるフェリペ五世を摂政の地位に就かせようとするものだった。この陰謀は 1718 年 12 月に発覚し、仏西間の短期の戦争の後にアルベローニの失寵を招き、アルベローニはイタリアに隠棲した。（JCB）
- 6) ギョーム・デュボワ（1656-1723）は、摂政オルレアン公爵の少年期にその家庭教師を務め、ルイ十四世の死後 1718 年に外務大臣に任じられ、まもなく枢機卿の地位を得、最後にフェヌロンの後のカンブレの大司教に任じられた。（JCB）
- 7) フランソワ・ド・サリニャック・ド・ラ・モット・フェヌロン（1751-1825）。僧侶、神学者、作家で、ルイ十四世の孫で王位継承者であったブルゴーニュ公爵の家庭教師を務める。ブルゴーニュ公爵の末子がルイ十五世としてルイ十四世亡き後王位を継承する。カンブレの大司教でもあった。
- 8) ジョン・ロー（1671-1729）はスコットランド出身の経済思想家、財政家であり、1720 年に外国人でありながらフランスの財務総監の地位につく。しかし彼が主唱した、ミシシッピー開発を担保とした不換紙幣発行政策は破綻し、彼は辞任し、国外へ逃亡した。
- 9) ルイ＝アンリ、コンデ公、ブルボン公爵（1692-1740）は、ルイ十四世時代

の宰相となり、その後任はフルリ枢機卿¹⁰⁾だったが、この宰相で見るべき点は老齢ということだけだった。一七三四年に勃発した戦争では、私の父がダンツィヒ包囲戦で負傷した¹¹⁾。一七四五年にはフォントノワの戦い¹²⁾があり、わが国の歴代の国王のうちでも好戦的などころがもっとも少ない王のひとり¹³⁾が、わが国がただ一度イギリス人相手に勝利を収めた大会戦で大勝利を獲得させた。そして世界に勝利した人物¹⁴⁾がワートルローで、クレシーの敗北¹⁵⁾、ポワティエの敗北¹⁶⁾、アジャンクールの敗北¹⁷⁾に、またひとつ敗北を付け加えた。ワートルローの教会は、一八一五年の戦い¹⁸⁾で亡くなったイギリス人士官の名前で飾られている。フォントノワの教

の王族で高名な武将である大コンデの曾孫にあたり、1718年には幼い国王の教育監督官となる。摂政オルレアン公爵の死後、1723年に首相となり、1726年までその地位にとどまる。(JPC)

- 10) アンリ・フルリ枢機卿（1653-1743）はフランスの政治家で1725年から1743年までフランスを治めた。(JPC)
- 11) 1733年から1735年にかけてのポーランド継承戦争のおり。シャトーブリアンの父親のこの戦争での負傷については、すでに『墓の彼方からの回想』第一巻第一章において語られている。(JCB)
- 12) オーストリア継承戦争の最中、1745年5月にフランス軍と、イギリス・ネーデルランド・オーストリアの連合軍が戦った会戦で、フランス軍が勝利した。当時の国王はルイ十五世である。
- 13) ルイ十五世。
- 14) ナポレオン。
- 15) 百年戦争の最中、1346年8月に英仏軍のあいだでカレー近郊のクレシー＝アン＝ポンティーユでおこなわれたクレシーの会戦で、フランス王フィリップ六世率いるフランス軍は、イングランド王エドワード三世に率いられたイングランド軍に大敗北を被った。
- 16) 百年戦争の最中、1356年9月に英仏軍のあいだで、ポワティエの南モーペルテュイでおこなわれた会戦で、ジャン二世率いるフランス軍がエドワード黒太子率いるイングランド軍に大敗北を被った。
- 17) 百年戦争中の1415年10月にカレー南方五十キロの地点にあるアジャンクールで、フランス軍総司令官ドルー伯爵シャルル一世率いるフランス軍は、イングランド王率いるイングランド軍に大敗北を被った。
- 18) ワートルローの戦い。

会に見られるのは、次の語が刻まれた石ひとつだけである。「ここにフィリップ・ド・ヴィトリ殿の遺体が憩う。ヴィトリ殿はフォントノワの戦いにおいて一七四五年五月一日二十七歳で亡くなった」。戦いがおこなわれた正確な場所を示す標柱などはまったくない。だがそのあたりの大地からは、今でもひしげた銃弾が中に入った頭蓋骨が掘り出される。フランス人は、彼らの額に勝利を書き込まれている。

その後、ベリル元帥¹⁹⁾の息子であるジゾール伯爵²⁰⁾がクルヴェルで倒れた。彼の死で、フーケ²¹⁾の直接の家系の名と子孫は絶えた。ド・ラ・ヴァリエール嬢²²⁾からド・シャートルー夫人²³⁾へと時代は移ったのだ。世紀から世紀へ、美人から美人へ、栄光から栄光へと移り変わるあいだに、世に知られていた名前がその終焉に達するのを見るのにはどこか悲しいところがある。

一七四五年六月には、スチュアート家の二代目の王位請求者²⁴⁾がその苦難の人生を始めていた。彼の苦難の人生のあいだに私は幼年期を過ごしていたのだが、その私が、イギリスの王位請求者に代わってアンリ五世²⁵⁾が

19) シャルル＝ルイ＝オーギュスト・フーケ、ベリル伯爵、後公爵、元帥（1684-1761）は、ルイ十四世の財務総監であったフーケの孫にあたる。（JPC）

20) ルイ＝マリー・フーケ、ジゾール伯爵（1732-1758）は前注ベリル元帥の息子で、七年戦争に1758年クルヴェルの会戦で死亡した。（JPC）

21) ニコラ・フーケ（1615-1680）は、ルイ十四世の財務総監であったが、その王をも凌ぐ勢力を疎まれて国王の不興を買い、失脚、投獄され獄死した。

22) フランソワーズ＝ルイズ・ド・ラ・ボーム・ル・ブラン、ラ・ヴァリエール公爵夫人（1644-1710）。ルイ十四世の最初の寵姫で、失寵の後にはカルメル会で信仰生活に入った。

23) マリー＝アンヌ・ド・マイイ＝ネル、ラ・トゥレル侯爵夫人、後シャートルー公爵夫人（1717-1774）。ルイ十五世の愛人のひとり。（JPC）

24) チャールズ・エドワード・スチュアート（1720-1788）は名誉革命でイギリス王位を追われたジェームズ二世の孫で、自分の父親が死ぬと、イギリスの王位継承権を主張した。

25) アンリ五世、ボルドー公爵、次いでシャンボール伯爵（1820-1883）はブルボン朝最後の国王シャルル十世の次男ベリー公爵の息子で、ベリー公爵の死

追放の生活を始めるのを見ることになったのだ。

これらの戦争の終結は、植民地におけるわが国の困難を予告するものだった。ラ・ブルドネ²⁶⁾がアジアでフランス軍旗の^{かたき}仇を取ってくれた。マドラス奪取後に、ラ・ブルドネがデュプレクス²⁷⁾と不和になったことがすべてを台無しにした。一七四八年に結ばれた和平²⁸⁾によって、そうした不幸は一時止まった。一七五五年に再び諸国間の争いが始まった。その争いのきっかけとなったのは、リスボンの地震で、この地震でラシーヌの孫が亡くなった。アカディア²⁹⁾の国境で係争の種となっていたわずかな土地を口実として、イギリスは宣戦布告もしていないのに、わが国の三百艘の商船を拿捕した。われわれはカナダを失った。これらは目立たない事件だが、ただその結果はたいへん大きなものだった。それらの事件の上にウルフ³⁰⁾とモンカルム³¹⁾の死が漂っている。アフリカとインドでわが国が領地

後に誕生する。七月革命が勃発した時、シャルル十世及び王太子アングレーム公爵はともに退位し、ボルドー公爵をアンリ五世として王位に就けようとしたが、支持が集まらず、オルレアン家のルイ＝フィリップが王位に就いた。しかし、正統王朝派の人々にとっては、ルイ＝フィリップの王位就任は篡奪に他ならず、正統の国王はブルボン家の長子系を継ぐアンリ五世であり、シャトーリアンはこうした人々を代表するひとりだった。

- 26) ベルトラン＝フランソワ・マエ、ラ・ブルドネ伯爵（1699-1753）は、フランスの海軍軍人、植民地行政家で、フランス島（モーリシャス島）、ブルボン島（レユニオン島）の総督を務めた。（JPC）
- 27) ジョゼフ＝フランソワ・デュプレクス（1697-1763）はフランスインド商館総支配人で、イギリスに対抗してフランス植民地拡張を図った。彼は1754年に本国に呼び戻され罷免された。（JPC）
- 28) 1748年にドイツのアーヘンでフランス・スペインとイギリス・オランダ・サルデーニャ・オーストリアのあいだで結ばれたオーストリア継承戦争を終結させるための講和条約。
- 29) カナダ南東部の旧フランス植民地。
- 30) ジェームズ・ウルフ（1727-1759）は、イギリスの陸軍将校で、カナダにおいてフランス植民地との戦いに勝利し、イギリスの覇権を確立するのに大きな貢献をしたが、戦闘中の傷がもとで亡くなった。
- 31) ルイ＝ジョゼフ・ド・モンカルム＝ゴゾン、サン＝ペラン侯爵（1712-1759）

を失うと、クライヴ卿³²⁾がベンガル地方の征服を始めた。ところが、そのあいだに、ジャンセニズムを巡る争いが起きていた。ダミアン³³⁾がルイ十五世を襲撃していた。ポーランドは分割され³⁴⁾、イエズス会士の追放が実行され、宮廷は「鹿の苑」³⁵⁾にまで墮落した。『家族契約』の著者はシャントルー³⁶⁾に引退していた。一方知的な革命がヴォルテールのもとで終了しようとしていた。モープー³⁷⁾の大法廷が設置された。ルイ十五世は処刑台を、自分を墮落させた寵姫³⁸⁾に残した。ルイ十五世の寵姫の処刑に先立ってガラ³⁹⁾とサンソン⁴⁰⁾がルイ十六世に遣わされていた。ガラが判決を

はフランスの軍人で、カナダにおいてイギリスの勢力と果敢に戦うが、戦闘で負傷し、フランス軍も敗北する。この敗北がカナダにおけるフランス勢力失墜を決定づけた。

- 32) ロバート・クライヴ卿（1725-1774）はイギリスのベンガル総督で、フランスに激しく敵対した。（JPC）
- 33) ロベール＝フランソワ・ダミアン（1715-1757）は1757年1月にルイ十五世暗殺に失敗し、同年3月末に処刑された。
- 34) ロシア、プロイセン、オーストリアによる第一次ポーランド分割は1772年である。
- 35) ルイ十五世のために、寵姫ポンパドゥール夫人がヴェルサイユの森に設けたとされる娼館。
- 36) エティエンヌ＝フランソワ、ショワズル公爵、スタンヴィル伯爵（1719-1785）はフランスの政治家で駐ローマ大使、駐ウィーン大使、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣などを歴任するが、彼が推進した政策の不調、またルイ十五世の寵姫デュ・バリール夫人との対立もあって、1770年に自分の領地シャントルーへと追放される。（JPC）
- 37) ルネ・ニコラ・ド・モープー（1714-1792）はフランスの法律家で、高等法院を攻撃し、王権に対抗しがちなこの裁判機関を弱体化する改革を推進した。ルイ十六世は即位するとモールパの進言を入れ、モープーを追放する。
- 38) デュ・バリール伯爵夫人、本名マリー＝ジャンヌ・ベキュ（1743-1793）。下層階級の出身で娼婦だったこともあると言われる。ルイ十五世の寵姫にまで登りつめるが、ルイ十五世の死とともに追放され、革命期にギロチンにかけられて殺された。
- 39) ドミニック・ジョゼフ・ガラ（1749-1833）。フランス革命期の政治家で全国三部会議員、1792年ダントンの後を追って司法大臣に就任し、この資格でルイ十六世に死刑判決を伝える。

読み上げ、サンソンが判決を執行した。

この最後の君主は一七七〇年五月一六日にオーストリアのマリア＝テレサの娘⁴¹⁾と結婚していた。その後この娘がどうなったかはよく知られている。マシヨー⁴²⁾、老モールバ⁴³⁾、経済学者テュルゴー⁴⁴⁾、古代の美德と新時代の意見を持ったマルゼルブ⁴⁵⁾、王室を破壊し、不吉な王命を出したサン＝ジェルマン⁴⁶⁾、そして最後にカロンヌ⁴⁷⁾とネッケル⁴⁸⁾が大臣として

40) サンソン家は代々バリの死刑執行人を務める家系で、革命が勃発した時の当主はシャルル＝アンリ・サンソン(1739-1806)で、彼がルイ十六世、マリー＝アントワネットらの死刑を執行した。

41) マリー＝アントワネット

42) ジャン＝バティスト・マシヨー・ダルヌヴィル(1701-1794)。フランスの政治家でルイ十五世治下に財務総監、海軍次官、国爾尚書などを歴任するが、ルイ十五世の寵姫ポンパドゥール夫人と対立し失脚し隠棲する。革命期に捕らえられ獄死する。

43) ジャン＝フレデリック・フェリポー、モールバ伯爵(1701-1781)はルイ十五世、ルイ十六世期に活躍した政治家で、ルイ十五世治下に海軍次官を二十年ほど務めた後に寵を失うが、ルイ十六世即位とともに国務大臣として復活し、死去までその地位を保つ。

44) アンヌ＝ロベール＝ジャック・テュルゴー、ローヌ男爵(1727-1781)は重農主義を説く経済学者で1774年から1776年まで財務総監を務めギルド廃止や穀物取引の自由化などを進め財政再建を目指す、特権身分からの反対を受け失脚する。

45) クレティアン＝ギョーム・ド・ラモワニオン・ド・マルゼルブ(1721-1794)は啓蒙哲学者、政治家で検閲局長官を務めていた際に、百科全書の出版をひそかに支援したことで知られる。革命期にルイ十六世が国民議会で裁かれることになると、自ら買って出てその弁護人を務めた。その後逮捕されギロチンにかけられる。シャトーブリアンの兄ジャン＝バティストはマルゼルブの孫娘と結婚していたが、マルゼルブとともに処刑された。

46) クロード＝ルイ、サン＝ジェルマン伯爵(1707-1778)は1774年から1777年まで陸軍大臣を務めた。1775年にはいくつかの王立会社を廃止した。彼が関わった改革のための数多くの王命のうち、軍隊における体刑の復活はもっとも不人気なもののひとつだった。(JCB)

47) シャルル＝アレクサンドル・カロンヌ(1734-1802)はフランスの貴族、政治家、財政家で1783年にネッケルの後任として財務総監の地位についた。課税の平等を実現しようとして名士会を招集したが、特権身分の激しい反対を受け失脚し、イギリスに亡命した。

次々と通過していった。

ルイ十六世は高等法院を呼び戻し、労役を廃止し、判決が出される前の拷問を廃止し、新教徒に公民権を返し、彼らの法的な結婚を認めた。一七七九年のアメリカ独立戦争は、自分の寛大さにいつも欺かれてばかりいるフランスにとっては政治的な誤りだったが、人類にとっては有益なものだった。この戦争は、世界中で、わが国の軍隊に対する尊敬とわが軍旗の名誉を再興した。

フランス革命が起きたが、この革命は八世紀にわたる英雄主義がその腹に保っていた戦闘的な世代を世の中に生み出そうとしていた。ルイ十六世の数々の長所も、その先祖たちが残した数々の過ちを償うものとはならなかった。だが摂理の打撃が襲うのは悪であって断じてひどくはない。神が美德のひとの寿命を地上で縮めるのは、天においてより長い寿命を与えるためではない。一七九三年⁴⁹⁾の星の下で、おおいなる深淵の源泉は絶たれた⁵⁰⁾。続いて、かつてのわれわれのあらゆる栄光が合体し、ボナパルトにおいてその最後の爆発を起こした。彼はわれわれの数々の栄光を自分の棺に入れて送り返した⁵¹⁾。

48) ジャック・ネッケル (1732-1804) はスイス生まれのフランスの銀行家、財政家で1776年テュルゴの失脚の後を受けて、外国人であったため財務総監という肩書ではなく財務長官という肩書でフランスの財政を担った。ネッケルの説いた財政改革は受け入れられず、1781年に罷免されるが、彼の後に任についたカロヌ、ロメニー・ド・ブリエンヌらも財政を立て直すことができず、1788年に再びネッケルが財政を担当することになる。革命の勃発を経て1790年に辞任し、故郷のジュネーヴ近くのコペに隠棲する。スタール夫人はネッケルのひとり娘である。

49) 1793年はフランス革命期のいわゆる恐怖政治期であり、ジャコバン派による独裁がおこなわれ、彼らに反対する多くの人々が反革命派のレッテルを貼られてギロチンで処刑された。

50) 聖書において大洪水はこのような語で予告されている。「創世記」、第五編、VII、11。(JCB)

51) この部分は、1840年11月のナポレオンの遺骸のフランス帰還を仄めかすも

第一一章

過去—ヨーロッパの古い秩序は息絶える

こうしたさまざまできごとが終わりを迎えているあいだに、私は生まれてきた。プロイセンとロシアというふたつの新しい帝国が、地上に、私に先立つことわずか半世紀の時期に姿を見せていた。コルシカは私が地上に姿を見せたときにフランス領となった⁵²⁾。私はボナパルトより二十日後にこの世に到着した⁵³⁾。彼は私を自分と一緒に連れまわした。一七八三年、私はルイ十六世の艦隊がブレストに姿を現したとき、海軍に入ろうとしていた⁵⁴⁾。その艦隊は、フランスの両翼の下で孵化しようとする一国民⁵⁵⁾の出生証書をもたらししていた。私の誕生は、ひとりの男の誕生と一国民の誕生と結びついている。私は巨大な光の蒼白い反映だったのだ。

現在の世界に目を移すと、その世界が大革命によって刻みつけられた大きな動きに続いて、オリエントから永遠に閉ざされていると思われていた中国に至るまで大震動を起こしているのがわかる。その結果、私たちの世界にかつて起きた数々の転覆など、もはやつまらぬものに思われるほど

のであり、1840年末に書かれている。

52) フランスとジェノヴァ共和国のあいだで1768年にコルシカの統治権を一定期間フランスに譲るという内容のヴェルサイユ条約が締結された。

53) ナポレオンの生年月日については議論がある。シャトーブリアンは通常、公式に言われている1769年8月15日を正しいものと認めない。『墓の彼方からの回想』一九巻ではナポレオンの生年月日を1768年2月5日とする説を採用していた。ここでは、むしろ1868年8月15日とする説に傾いているようである。(JCB)

54) アメリカ独立戦争に参加したフランスの艦隊は1783年にブルターニュの港であるブレストに凱旋した。このとき、シャトーブリアンはブレストにいて艦隊の凱旋の光景を目にしたが、そのときの様子は『墓の彼方からの回想』第二巻第八章に描かれている。

55) アメリカ合衆国。

だ。ナポレオンがかつてわれわれの古い地球を騒がしていたあらゆる物音を消し去ってしまったように、諸国民が全般的に上を下への大騒ぎをしている現在では、ナポレオンの名声が引き起こした物音もほとんど聞こえないようになってしまっただろう。

皇帝⁵⁶⁾は未来を予見させる興奮のうちにわれわれを置き去りにした。他のどの国よりも成熟し、どの国よりも先に進んだわれわれは、数多くの凋落の徴候を示している。生命の危機にさらされた病人が墓の中で見いだすだろうものを気にするように、自分たちの力が失われつつあると感じる一国民は、自分たちを待ち受ける未来の運命について不安を抱くものだ。それで次から次へと政治的な邪説が現れるのだ。ヨーロッパの古い秩序は息絶えようとしている。われわれが現在おこなっている論争は後世から見れば子供っぽい争いに見えることだろう。もはや何も存在していない。経験の権威、年齢の権威、高貴な生まれ、天才、才能、美徳、一切は否定された。何人かの人間が廢墟の上に攀じ登り自分は巨人だと言い張り、卑しい小人として転がりまわっている。生き残るだろう、そしてわれわれが入り込みつつある闇のステップを進みながら松明を掲げ続けるよう運命づけられた二十人ほどの人間、そのわずかな人々を除いては、自分たちのうちに豊かな機知、しっかりした知識、あらゆる成功の萌芽を有していた一世代全体が、自分たちが持っていたそうした優れたものを、不安のうちに、すべて押しつぶしてしまった。彼らが抱いている不安が実りないものであるのは、彼らの高慢さが不毛であるのと同様である。名もない多くの人々が、自分たちがなぜそうするのかもわからずに動き回っている。ちょうど、中世の民衆のあいだに見られたいくつもの集団と同じようだ。自分たちを導いてくれる羊飼いの姿がそれとわからなくなってしまった飢えた羊の群れのように平野から山へと、また山から平野へと駆け回り、風と太陽

56) ナポレオン。

に鍛えられた牧者の経験を重んじることを忘れたのだ。都会の生活においては、すべてがとりあえずのものとなり果ててしまっている。宗教と道徳はもはや受け入れられない。あるいは、誰もがそれらを自分勝手な仕方では解釈している。それほど高貴ではない物事においても、確信の力は弱く、生命力も弱まってしまっている。名声を得ても、それは一時間しかもたない。本はわずか一日で古びてしまい、作家たちは人々の注意を引きつけるために互いに激しく争っている。これもまた空しいことだ。彼らが息を引き取る音さえ人々の耳には入らない。

人々の精神のこのような状態の結果、強い印象を与える手段としては、処刑台の場面や、穢れた風俗しか考えられなくなってしまった。真の涙とは美しい詩が流させる涙であり、賛嘆の念と苦しみがそこに混じった涙であることは忘れ去られてしまっている。だが、才能ある人々が摂政期と恐怖政治の時期の話題で身を養っている現在、早晚死に絶える運命のわれわれの国語のためにどうして新たな主題を探す必要などあるだろう。人間の精神からはもはや、宇宙の遺産となるべきあしたの思考はもはや生まれてこないだろう。

以上が、皆が言い合っていることであり、皆が嘆いていることである。しかしそれなのに、今なお数多くの幻想が抱かれている。最期が近づけば近づくほど、ひとは自分たちにまだ生命が残っていると思ひ込みたがるものだ。自分たちは君主だと想像している君主たち、自分たちは大臣だと思ひ込んでいる大臣たち、自分たちの演説を真に受けている代議士たち、今朝まだものを所有しているので、晩になっても自分たちの所有物は失われていないだろうと確信している所有者たちが見える。個人の利益、個人の野心が、俗人たちに、時代が深刻な状態に陥っていることを見えなくしている。しかし、いつきの時勢の揺れ動きは、深淵の水面に刻まれた漣さざなみでしかない。それによって、深いところで起きている波の動きは減ぜられる

わけではないのだ。個々人が興じている、偶然に支配されるけち臭い富籤の傍らで、人類全体が大きな賭けをしている。国王たちはまだ手札を手にしており、彼らはその手札で諸国民に代わって勝負をしている。諸国民は君主たちよりましだろうか。それはまた別の問題であり、主要な事実に変更を加えるものではない。子どもの気慰み、白い死衣の上を滑る影にどんな重要性があるだろう。蛮人の侵入に続いて思想の侵入が起きた。現代の腐敗した文明は自ら壊れていく。文明を入れていた器は他の器に液体を注ぎはしなかった。器自体が壊れてしまったのだ。

第一二章

財産の不平等—知性の発展による、そして物質上の発展による危険

社会はどの時代になったら消え失せるのだろうか。どのようなできごとが社会の動きを中断させられるだろうか。ローマでは法の支配に人間の支配が取って代わった。共和国から帝国への移行がおこなわれたのだ。われわれの革命は逆の方向に進む。その運動の方向は、王国から共和国へと、あるいは特定の形を言うことにこだわらないならば、民主制へと進もうとするものである。この移行は困難なしにはおこなわれえない

何千もの困難があるがそのひとつだけを述べれば、たとえば所有権は現在と同じような形で配分され続けるだろうか。ランスで生まれた王権⁵⁷⁾は、道徳的法律の数々を広めることによって、所有権に伴う過酷さを和らげることができた。それは同じ王権が、人間性を慈善に変えたのと同様で

57) シャンパーニュ地方の中心都市ランスはメロヴィング朝のクロヴィスが491年にこの町で聖別式を挙行した故事により、フランス歴代の国王の戴冠式がおこなわれる場所となっている。ランスで生まれた王権とは、フランスの王権のことである。

ある。ある個人が何百万という財産を持ち、他の人々が飢えて死にかけているような国家は、宗教がもはやそこになく、人々が払う犠牲を説明するためにあの世での期待を示すことがなければ、存続していけるだろうか。母親たちが干からびた乳房で乳をやっている子供たちがいる。彼女たちは一口のパンがないので、死にかけた赤ん坊に栄養を与えられない。夜、身体を温める毛布がないので、夜のあいだ、互いに身体を絡めあっている家族がいる。ある者は、自分が所有する広大な畑に作物が実るのを見る。別の者は、生国から自分の墓のためにわずか六ピエの土地しか貸し与えられない。だが、六ピエの土地は死者にどれだけの量の麦穂を与えられるだろうか。

教育が下層階級に広がるに連れて、下層階級の人々は今や非宗教的なものとなった社会秩序を蝕む瑕瑾に気づくことになる。富者と貧者の生活条件、財産の差があまりに大きい場合、それがひとの目から隠されているあいだは辛抱できるとしても、この差について皆が気づくようになれば、致命的な一撃が社会秩序に与えられる。もしそうできるものなら、貴族制度という虚構をもう一度打ち立ててみようとしてみるがいい。字が読めるようになり、もはや信仰を持たず、あなた方と同じ教育を受けた貧しい人々に、隣人は余分な財産を彼らの千倍も持っているのに、彼らはあらゆるものを奪われていることに甘んじなければならぬと説得してみるがいい。最後の手段としては、彼らを殺すしかないだろう。

蒸気機関が完全なものとなり、高架通信⁵⁸⁾、鉄道と組み合わせられ、蒸気機関が距離というものを廃棄してしまうようになったときには、もはや移動するのは商品だけではなく、羽が生えた思想もおおいに移動するこ

58) 遠距離間の短時間通信を可能にする高架通信はフランス革命中の1794年にクロード・ショブにより創案された。その後、その通信網はフランス全土に拡大され、電報に取って代わられる直前の1844年には総距離5000キロに達していた。

とになる。同一国家の諸地方のあいだですでに税関が廃止されているように、諸国家間でも税関が廃止されるようになったときに、毎日頻繁な関係を互いに持つ諸国が諸国民の統一を目指すようになったときに、あなたは、どのようにして、人々が互いに隔てられていた昔のあり方を復活させようというのだろうか。

他方社会は、物質に関わる発展によってと同じくらい、知性の多くの人々への広がりによっても脅かされる。機械の数が多くなり、またその種類も増えることによって、人々が自分の腕を用いてすることがなくなる事態を想像していただきたい。唯一の、そして全社会を支配する金銭づくのもの、すなわち物質が、畑地や家庭で財産を生み出していた多様なものどもに置き換わってしまっていることを確認していただきたい。もはやすることのなくなった人類をどうすればよいだろうか。怠惰なものになってしまった諸情念や知性をどうすればよいだろうか。肉体の頑健さは肉体を用いる労働によって維持される。肉体を用いる仕事がなくなってしまうと、肉体の力も消え失せてしまう。私たちはあのアジアの国々に似たものになってしまおう。その国々は最初にやってきた侵略者の餌食となり、鉄で武装した手に対して自らを守ることもできずにいる。だから、自由は労働によってしか維持されえない。なぜなら労働こそが力を生み出すからだ。アダムの子供たち⁵⁹⁾に課せられた呪いを解いてみるがいい。彼らは従属のうちに滅びてしまおう。 *In sudore vultus tui, vesceris pane* 「他人の額の汗によって、汝は汝の食を得るだろう」⁶⁰⁾。だから神によってかけられた呪いは、われわれ人類の運命の一部をなしているのだ。人間は自らの思考の奴隷であるほどには、自らの汗の奴隷ではない。こうして、社会をひと巡りし、さまざまな文明を通過し、未だ知られぬ数々の完成を思い描

59) 人間。

60) 「創世記」、III、19。(JCB)

いた後に、われわれは出発点に、すなわち、聖書が述べる諸真実に再び直面させられる。

第一三章

諸王国の失墜——社会の頹落と個人の伸長

わが国の王国が八世紀続いた期間、フランスこそがヨーロッパの知性の、ヨーロッパの継続性の、ヨーロッパの休息の中心だった。この王国が失われると、ヨーロッパはたちまちのうちに民主制に傾いた。良きにつけ悪しきにつけ、人類は幼年時代を脱してしまった。王侯たちは人類の後見の権利を自らのものとしていたのだが、諸国民は成年に達し、もはや後見人はいらないと言ひ張る。ダヴィデ王⁶¹⁾以来、つい最近まで、国王たちが世を治めるよう命じられてきた⁶²⁾。民衆が自らを治めることを使命とする時代が始まりつつある。ギリシャ、カルタゴ、ローマには奴隷がいる小さな共和国が存在したものの、古代には、地球上至るところ王国こそが通常の状態だった。フランス歴代の王こそが守護者だったのだが、フランス王が存在しなくなってからというもの、近代社会全体が王国体制を離れた。神は、王権の頹落を速めるため、あちらこちらの国で、身体を動かさなくなった国王たち、産着を着た幼い娘たち、結婚したばかりの若い娘たちに王杖を委ねた⁶³⁾。この不信の時代において、こうした、牙をもたないライ

61) 古代イスラエルの王（在位前 1000- 前 961 頃）でエルサレムに都を置き、全イスラエルの王となる。旧約聖書の「サムエル記」と「列王記」に登場する。

62) 国王に与えられたこの「使命」の起源は預言者サムエルが若きダヴィデを国王に指名したことである。「サムエル記」第一の書、XVI。(JCB)

63) 1840 年にはプロイセン王フリードリヒ＝ヴィルヘルム三世は亡くなりかけていた。スペインでは幼い女王イサベラは二歳だった。イギリスでは十八歳で王位に就いたヴィクトリア女王が従兄のアルバート公と結婚する。(JCB)

オンたち、爪を持たぬ雌ライオンたち、まだ乳を吸っていたり、婚約したばかりの小娘たちに従えと、物事に通じた男たちが命じられていたのである。

本当に彼らを守る気があるのか怪しい衛兵たちの三重の垣の後ろで安心してきっていた国王たちに対して、このうえなく大胆な諸原理が告げられる。民主制が彼らに打ち勝つ。民主制は国王たちの宮殿の一階から屋根裏まで一階一階昇っていき、国王たちは屋根裏部屋の天窓から泳ぎでもするかのように身を投げる。

このように事態が進展する只中における巨大な矛盾に注意していただきたい。物質的な条件が改善し、知的な進歩が増大するのに、諸国民はそのような事態の進展から利益を得どころか、力を失っている。なぜこのような矛盾が生じるのだろうか。

それはわれわれが道徳的次元で失うものが多かったからだ。どの時代にも犯罪というものは存在した。だが、今日におけるように、宗教感情が失われ、罪が冷静に犯されることはなかった。現在では犯罪はひとを憤激させない。それらは、時代の進展の当然の結果のように見える。かつて、犯罪が現在とは違ったふうに判断されていたのは、ひとが現在では言うのをためらわないように、人間についての人々の認識が今日ほど進んでいなかったからである。現在では犯罪は冷静に分析され、坩堝で実験対象にされるが、それは化学がごみ捨て場からそこに含まれているものを見つけ出してくるように、そこからどのような有益なものを引き出せるかを見ようとしているのである。諸感覚の腐敗よりよほど破壊的なものである精神の腐敗は必然的な結果として受け容れられている。精神の腐敗はもはや倒錯的な数人の個人のものではなく、あらゆる人々に関わるものとなってしまった。

ある人々は、彼らに魂があると証明され、この世の人生を越えたところ

にもうひとつの人生があると証明されたら、侮辱されたと感じることだろう。彼らは、父親たちの臆病さを越えられなければ、自分たちには堅固さ、力、天才が欠けていると思うだろう。彼らは虚無を、あるいはこう言ったほうがよければ懷疑を、おそらく不快ではあるが否定しがたい真実として採用する。われわれの傲慢さがどれほどの愚鈍化をもたらしたかに感心していただきたい。

社会の衰退と個人の伸長は以下のように説明される。知性が進むにつれて道徳感覚も発展するなら、社会の衰退にはそれと釣り合う力が働くことになり、人類は危険に陥ることなく発展していけることだろう。だが実際に生じるのはそれとはまったく逆のことである。知性が開けてくるにつれて、善悪の知覚は鈍いものになる。思想が拡大するにつれて、良心は縮んでいく。そうだ、社会は滅びるだろう。かつて世界を救った自由は、宗教に支えをを求めることをやめてしまったので、そうできなくなるだろう。かつては品行を維持するのに役立つ秩序が、堅固に打ち立てられることはなくなるだろう。思想の無秩序が秩序を打ち倒してしまうからである。かつては力を伝えていた王位は、もはや不幸を生み出すのにしか役立たない。キリストのように藁の上で生まれた者でなければ、もはや何びとといえども救われる者はない。ラッパが民衆の復活を吹き鳴らした瞬間に歴代の王の遺骸がサン＝ドニ教会⁶⁴から掘り出されたとき、崩れ去った彼らの墓から引き出された王たちが平民としての埋葬を待っていたとき、屑拾いたちがこの諸世紀への最後の審判に立ち合いにやってきたとき、屑拾いたちは角灯を掲げて、永遠の夜の中を見つめた。彼らは最初の略奪を免れた残りのものを掘り出した。国王たちはもうそこにはいなかった。だがまだ王権はそこにあった。彼らは王権を時の腸^{はらわた}から引き抜き、屑籠の中に投げ込んだ。

64) パリ北郊のサン＝ドニ教会にはフランス歴代国王の墓所がある。

第一四章

未来—未来を理解するのは難しい

以上が古いヨーロッパについて言えることである。それが再生することは決してないだろう。若いヨーロッパにはそれよりよい運命が待っているだろうか。現在の世界、神聖なものと認められる権威を欠く世界はふたつの不可能性のあいだに置かれているように見える。過去の不可能性と未来の不可能性である。そんなことを思い描いている人々もいるが、現在われわれが悪しき状態にあるとしても、その悪から善が再生するなどとは考えないほうがいい。その根源において立ち行かなくなった人間の本性は、そんなふうには正しく歩めるものではない。たとえば、自由の過剰は専制に導く。だが暴政の過剰は暴政にしか導かない。暴政はわれわれを墮落させ、われわれを独立して生きることができない者にしてしまう。ティベリウス⁶⁵⁾はローマを共和制へと遡らせはしなかった。ティベリウスがその後に残したのはカリグラ⁶⁶⁾だけである。

そうしたことを納得したくないがために、人々は、時の進展のうちには、われわれには見わけられない政治体制が隠されているかもしれない根拠もなく言うだけで満足する。古典古代全体、この古代のもっともすぐれた天才たちといえども、奴隷がいない社会など理解できただろうか。そしてわれわれは奴隷がいない社会が存在しているのを見ている。これから生まれ出ようとしている文明においては、人類はより偉大になるだろうと

65) ティベリウス・ユリウス・カエサル（紀元前 42- 紀元後 37、ローマ皇帝在位 14-37）。ローマ帝国第二代皇帝。

66) カリグラの名で知られるガイウス・ユリウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス（12-41、ローマ皇帝在位 37-41）はローマ帝国第三代皇帝でその残忍さで知られる。

言われる。私自身、そう言ったことがある。だが、個人がその力を失うことを恐れるべきではないだろうか。われわれは、一致して、自分たちの蜜のために働く勤勉なミツバチになることはできるだろう。「物質的利益のみが重んじられる」世界においては、人間は仕事のために協働し、多くの人間が集まれば、より早く、さまざまな方法を用いて、目的に達することができる。個人が多人数集まって多くのピラミッドが建てられるだろう。それぞれが自分なりの研究を重ねることによって、個人は多くの発見をするだろう。科学は物質世界のあらゆる領域を探求するだろう。だが、「精神」世界においても事情は同じだと言えるだろうか。何千もの頭脳が協力しても、ひとりのホメロスの頭によって生み出された傑作をこしらえられはしないだろう。

その構成員が財においても、教育においても、等しい分け前を享受するような社会は、神の目から見て、われらが祖先の社会より優れた光景に見えるだろうと言われたものだ⁶⁷⁾。現今見られる狂気は、諸民族を統一し、人類全体がまるでひとりの人間でしかないようにしようというものだ。そうなれるものならそうしてみればいい。だが、人々が皆同じ能力を得ることになれば、一連の私的感情は消滅してしまうのではないだろうか。もはや家族の甘美さはなくなり、家庭の魅力は永遠に失われてしまうだろう。すべてがあなたの同郷人と見なされることになる白人、黒人、黄色人種のあいだにあって、あなたはもはや兄弟の首に抱きつくことはできなくなるだろう。かつての生活には何も良きものはなかったのだろうか。あなたが蔦で囲まれた窓から見ていた限られた空間には何も良きものはなかったのだろうか。地平線の向こう側に、秋に見かけた唯一の旅行者である通りすがりの鳥からわずかに語られた見知らぬ国々があるのだとあなたは思い込んでいた。次のようなさまざまな思いを抱くのは幸せなことだった。あな

67) このように言ったのはアレクシ・ド・トクヴィルである。(JCB)

たを取り巻く丘陵が目に見えなくなることはないだろうと思うこと、あなたが取り結ぶ友情や、あなたが経験する恋をそれらの丘陵が閉じ込めているだろうと思うこと、住まいの周りの夜の底から聞こえてくる物音が、あなたがその音を聞きながら眠りにつく唯一の音だと思うこと、自分の魂の孤独が乱されることは決してないだろうと思うこと、そこでは、いつもあなたが待っていてくれる同じさまざまな考えに出会うことができ、なじみの会話をあなたと交わしてくれると思うこと。あなたは自分がどこで生まれたかを、そして自分の墓がどこに置かれるだろうかを知っていた。森の奥深く入り込みながら、あなたは言うことができた。

私が生まれるのを見た美しい木々よ、
まもなく君たちは私が死ぬのを見るだろう⁶⁸⁾。

人間が偉大になるには、旅に出る必要はない。人間のうちには広大さが秘められている。あなたの胸から漏れた言葉の大きさは限られたものではなく、何千もの魂にその符を見い出す。自らのうちにこの音色を持っていない者がそれを全宇宙に求めても無駄なことだ。森の奥で切り倒された木の幹に腰かけなさい。あなた自身の深い忘却のうちに、あなたの不動のうちに、あなたの沈黙のうちに、あなたが無限を見い出せないなら、ガンジス川の河畔まで迷い込んでも無駄なことだ。

個別の国が存在せず、もはやフランスでも、イギリスでも、ドイツでも、スペインでも、ポルトガルでも、イタリアでもない、普遍的な社会というものがあるとして、それはいったいいかなるものになってしまうだろう。ロシアでも、タタールでも、ペルシャでも、インドでも、中国でも、アメリカでもなく、あるいはむしろ同時にこれらすべてであるような社会

68) ショーリュウ (1639-1720) の「フォントネーへの賛歌」の一節。(JCB)

はいかなるものになってしまうだろう。そうした社会の習俗、科学、芸術、詩にとってはどのような結果が生じるだろう。それぞれに異なった風土で、それぞれに異なった民族独特の仕方と同時に感じられる諸情念はどのように表現されることになるだろうか。人々に共通のものとなった青春、壮年期、老年期を照らし出す数多くの太陽が生み出す、人々が感じるさまざまな必要、人々が見るさまざまなイメージの混乱は言語のうちにどのように入り込むだろう。そしてその言語はどのようなものだろう。数々の社会がひとつに融合すれば、普遍的なひとつの言語が生まれるのだろうか。それとも、日常的に用いられるひとつき合いのための特殊な言語がひとつでき、それぞれの国民はもとの国語を話し続けるのだろうか。あるいはさまざまな言語を誰もが理解するようになるのだろうか。皆にとって等しいどのような規則のもとに、どのような唯一の法のもとに、この社会は存在することになるのだろうか。遍在性の力によって拡大され、至るところ掘りつくされた地球の今や縮められた距離によって小さくなった大地のどこにまだ場所が見つけられるだろうか。もはや、科学に、地球を出てよその星に行く方法をたずねるより仕方がなくなってしまうだろう。

第一五章

サン＝シモン主義者—ファランステール主義者—フーリエ主義者—オーウェン主義者—社会主義者—共産主義者—統一主義者—平等主義者

個人所有にうんざりして、あなたは政府を唯一の所有者にし、物乞いをするようになった共同体に、個人の価値に応じた取り分を配分する任務を与えるというのだろうか。だが誰がその価値を正確に判断するのか。誰があなたの命令を実行させるほどの力、権威を持てるだろう。誰が、この生

きた不動産の銀行を管理し、それを有効なものにできるだろう。

あなたは労働の協同組合を作ろうとするだろうか。弱者、病者、怠惰な者、知性に欠けた者たちが共同体には必ずいて、彼らの不適応性がつきものだが、彼らは共同体に何をもたらすのだろうか。

また別のことも考えられる。給料をその代替物に変えることによって、一種の株式会社、経営者と工具両者、すなわち知性と物理的力の合資会社のようなものを作り出すことができるだろう。そこでは、一方が資本とアイデアを、他方が勤勉さと労働を持ち寄り、利益は両者のあいだで分けられることになるだろう。もし人間が完全なものになれるのなら、これはたいへん結構なことだ。もし、いさかいにも、吝嗇にも、妬みにも出くわさないでそれができるなら、たいへん結構なことだ。だが、そうした集まりの中でただひとりでも自分の要求を押し通そうとする人間が出てくれば、すべてが崩壊する。分裂と訴訟が始まる。こうしたやり方は理論の上では可能に見えても、実行するとすると他のやり方と同様不可能なものである。

どっちつかずの意見しか持たず、あなたはとりあえず、すべての人間に屋根のある住居があり、火があり、衣服があり、十分な食料が確保できる社会を求めようとするだろうか。あなたがそれぞれの住民に、そうしたものをようやくして与えたとしても、それぞれの人間の資質、欠点により、あなたがおこなった割り当ては阻害されるか、不正なものにされてしまうだろう。ある人間はより多くの食糧を必要とし、また別の人間は他の人間ほど多くは働けない。しまり屋で働き者の人々は金持ちになり、浪費家、怠け者、病人は悲惨な境遇に再び転落するだろう。というのも、あなたがあらゆる人間に同じ気質を与えることはできないからだ。あなたの努力にもかかわらず、自然によって与えられた不平等が再び姿を現すだろう。

そして、われわれが、家族を生み出すために要求された合法的で複雑な

数々の用心、すなわち夫婦の権利、後見、相続権の再取得、相続権承継人といったものにかからめとられるままになっていたなどは思わないようにしていただきたい。結婚制度は、馬鹿げた抑圧であるのはよく知られている。私たちはそんなものは廃止してしまう。もし息子が父を殺すなら、しっかり証明されているように、父親殺しの罪を犯しているのは息子ではない。自分が生き続けることによって息子を生きながら死んだも同然のものにしているのは父のほうなのである。だから、われわれは地面すれすれに建てられた建築物の迷路について頭を悩ましたりしないようにしよう。われわれの祖父たちが創り出したこうした欠陥の多い下らぬ話に注意を払うなど無益である。

こうは言ってみるものの、近代の諸セクトには、自分たちの教説がそのままでは実現不可能だと見て取って、そこに、それらを許してもらうために、道徳、宗教といった語を混ぜ合わせるものがある。彼らが考えているのは、待つ術^{すべ}を知るならば、われわれをまずアメリカ人の理想的な凡庸さに導けるのではないかということである。彼らは目をつぶり、アメリカ人が財を所有する人々であり、しかも自分の所有におおいに執着する人々であることを忘れようとする。だがこれを認めるならば、話は少し違ってくる。

また別のセクトは、より親切で、文明の一種の優雅さは認めようとし、われわれを「憲法を尊重する」中国人に変えるだけで満足しようとする。その場合、人間は、まあ無神論者といったもの、知恵のある自由な老人になり、黄色い服をまとして何世紀にもわたり花の苗床に座り、多くの人々によって獲得された快適さの中で日々を過ごし、すべてを作り出し、すべてを見出し、なし遂げられた数々の進歩の只中で、無為に日を送り、広東から万里の長城まで、ちょっと汽車に乗ったり、気球に乗ったりして、灌漑すべき沼地、掘るべき運河について、中国の他の実業家とおしゃべり

をしにいく。人間がアメリカ人になってしまうにせよ、中国人になってしまうにせよ、幸いなことに、こんな幸せが自分に到来する前に、私はこの世から旅立ってしまったことだろう。

最後にひとつの解決策が残るだろう。人間の性質が完全に墮落することによって、人々は自分が持っているもので満足することに折り合いをつけるようになるかもしれない。民衆は独立への愛を失うが、それは金銭への愛によって取って代わられる。同時に、国王たちは権力への愛を失うが、それは国家元首の特別歳費への愛に変造される。こうして君主たちと家臣たちのあいだには妥協が成立し、両者が混じり合ってもに私生児的な政治秩序の中ではい回ることに魅力を感じるようになるだろう。彼らは、かつてのライ病患者収容施設におけるように、あるいは今日病人たちが互いを慰め合うために身を浸す泥の中でと同様に、気持ちを楽にして互いの欠陥を見せ合うだろう。いろいろなものが混じり合った泥の中で、穏やかな爬虫類のようになって跳ね回ることだろう。

しかし、われわれの社会の現状にあっては、知的性質の快楽を肉体的性質の快楽によって置き換えようと望むことは、時代について勘違いすることだ。肉体的快楽は、かつての貴族的な人々の生活にはふさわしいものだった。世界の主人だった彼らは、宮殿と奴隷の群れを所有していた。彼らの個人的所有地はアフリカの広大な地域を含んでいた。しかし、今や、自分の貧相な余暇をあなたはどこで過ごそうというのだろうか。どのような広大で豪華な装飾が施された浴場にあなたは香水を、花々を、横笛を吹き鳴らす娘たちを、イオニア⁶⁹⁾の高級娼婦たちを置こうというのだろうか。何かをまだ望まねばならない人間はヘリオガバルス⁷⁰⁾ではない。こうした物

69) イオニアは古代ギリシャでエーゲ海に面したアナトリア半島南西部の地方名。

70) 通称ヘリオガバルスと呼ばれるマルクス・アウレリウス・アントニヌス・アウグストゥス（203-222、ローマ皇帝在位 218-222）は、14歳で皇帝となり、放縦と奢侈の限りを尽くした。

質的享樂に不可欠な富をあなたはどこで手に入れようというのだろうか。魂にはたいしたものはいらないが、身体は浪費家なのだ。

ここで、絶対の平等についてももう少し真面目にものを言っておこう。そのような平等が実現されれば、身体の隷属だけでなく、魂の隷属をも招来することになってしまうだろう。それは、そもそも個人に必ずつきまとう道徳的、肉体的不平等をまさしく破壊してしまうだろう。われわれの意志は、社会の構成員全体の監視の下で管理され、われわれが持っているあらゆる能力は役立たずのものになってしまうだろう。無限のものを求めるのはわれわれの本性である。われわれの知性に、あるいはわれわれの諸情念にさえ、限りなく良きことを考えるのを禁じてみるがいい。あなたは人間をカタツムリの生活に貶めてしまうことになる。人間を機械に変えてしまうことになるのだ。というのも、考え違いをしなくて欲しいのだが、あらゆるものに到達する可能性がなくなれば、また永遠に生きられるという考えが失われてしまえば、至るところ虚無が支配することになる。個人の所有ということがなくなってしまうと、自由なものは何もなくなってしまう。所有物をまったく持たない人間は、他者からの独立を保てない。個人の所有が現在のように個々人のそれであるような社会に生きているにせよ、財がすべての人間に共有されている社会に生きているにせよ、そうした人間は無産者になってしまうか、給与生活者になってしまうかである。財が共有されれば、社会は会計係が扉でパンを分配する修道院に似たものになってしまうだろう。親子代々伝えられ、不可侵の所有財産こそ、われわれ個人を守ってくれる唯一のものである。所有とは「自由」に他ならない。「絶対的な平等」とはこの平等への「完全な服従」を前提とするものであり、このうえなく辛い隷属を生み出し、個人を、彼を束縛する行為に従わされ、果てしもなく同じ道を歩むことを強いられる家畜に変えてしまうだろう。

私がこのように考えていたところ、ド・ラムネー氏⁷¹⁾が、牢獄に閉じ込められていながら、私が否定したさまざまな考え方を、詩人の輝きを放つ彼の強力な論理で攻撃していた⁷²⁾。『民衆の過去と未来について』と題された彼の小冊子から取られた一節が、私の考えを補強してくれるだろう。彼の言うことに耳を傾けよう。以下の引用で語っているのはド・ラムネー氏である。

「厳密で絶対的な平等というこの目的を自分のものとする人々のなかで、もっとも首尾一貫した人々は、そのような平等を打ち立て、維持するためには、力を、専制を用いなければならないと、どのような形のものであれ、独裁が必要だと結論している。

絶対的な平等を擁護する人々は、第一に、自然に発生する不平等を和らげ、もし可能ならばそうした不平等を破壊するために、それを攻撃することを強いられる。人間のそれぞれがどのように自然によって作られるか、発展させられるかを規定する諸条件をどうすることもできないので、そのような人々の働きかけは人間が生まれる瞬間、子供が母親の懐から外に出る瞬間に開始される。その瞬間から国家が子供をわがものとする。国家こそが精神的な存在としての人間にとっても、生物体としての人間にとっても絶対の主人となるのである。知性も良心も、すべてが国家しだいのものとなり、あらゆるものが国家に

71) フェリシテ・ロベール・ド・ラムネー（1782-1854）はフランスカトリックの聖職者、思想家、キリスト教社会主義者。サン＝マロに生まれたラムネーはカトリック思想家として将来を嘱望された聖職者だったが、しだいに社会改革、政治改革を志すようになり、その著作ゆえにローマ教皇から破門される。後独自のキリスト教社会主義の立場で活動した。1848年には国民議会議員になっている。

72) ラムネーは1840年12月26日、公刊した小冊子『国家と政府』を咎められ、2000フランの罰金と、1年の禁固に処せられていた。彼がその小冊子に続く小冊子を書いたのはこの拘禁中、サント＝ペラージュ牢獄においてであり、その冊子は1841年9月に公刊される。(JCB)

従わせられる。そうなればもはやそこには家族もなく、父性もなく、結婚もない。人間の雄と雌とその子供たちがいるのみで、国家はそれらを思いのまま操り、精神的にも肉体的にも自分が望むものにする。そこに見られるのは全般的で、しかもひどい奴隷状態であり、そうした奴隷状態を免れるものは何もなく、それは魂にまで及ぶ。

物質的なことがらについて言えば、単にものを分け合うということでは、平等は多少とも長続きする仕方では打ち立てられない。ただ単に土地所有だけを問題にするなら、土地を個人の数と同じ数の部分に分割すればいいと考えるかもしれない。だが生きている個人の数はずねに変化する。であってみれば、この最初の分割にも絶えず修正が加えられなければならない。あらゆる個人所有を廃棄してしまうのだから、権利をもって所有を主張できる者は国家しかいなくなる。このような所有の様態は、もしそれが意志的なものであるならば自らの誓願によって清貧と屈従に従う修道僧のそれのようなものになるし、もしそれが意志的なものでないとするなら、奴隷のそれのようなものになる。そのような状態にあっては、彼の生存条件の厳しさを和らげるものは何もない。人間同士を結ぶあらゆる絆、共感に基づくあらゆる関係、相互に対する献身、互いに対する奉仕、自らの意志でおこなわれる自己放棄、つまり人生の魅力、人生の偉大さを生み出すあらゆるものは、消え失せてしまい、これを限りに失われてしまう。

民衆の未来を思って、問題を解決するためにこれまでに提起されてきた方法はすべて、人間が生存を続けていくために不可欠な諸条件を否定するものであり、直接的な仕方であれ、潜在的な仕方であれ、義務、結婚、家族といったものを破壊してしまう。もしたとえそうした方法が社会に適用されるものであるとしても、あらゆる現実的な進歩がそれに要約される自由を生み出すどころか、どんなに歴史を遡っ

てみても比肩すべきものが見つからないような従属状態しか生み出さ
ないだろう」。

この論理には、さらに付け加えるべきものはまったく何もない。

私が囚人たちに会いに行くのは、タルテュフ⁷³⁾のように、その囚人たち
に施しを与えるためではない。自分よりましな人々との交際によって己が
知性をより豊かにするためである。彼らの意見が自分の意見と違っても、
私は何も恐れない。頑固なキリスト教徒である私は、地上に現れるどのよ
うなすばらしい天才に会っても自らの信仰を揺るがせられたりはしないだ
ろう。そうした人々を気の毒に思うだけであり、私の慈愛の心が、彼らの
誘惑から私を守ってくれる。私は過剰によって罪びとなのであり、彼らは
欠けたところがあることによって罪びとなのである。私のほうは彼らが理
解することを理解できるが、彼らは私が理解できることを理解できない。
かつて高貴で不幸なカレル⁷⁴⁾を訪ねていったことのある同じ牢獄に、今日
私はラムネー師を訪ねていく。七月革命は、自分がその長所を判断するこ
とも、その輝きを支えることもできないすぐれた人々を牢獄の暗闇へと押
しやってしまった。牢獄の最上階にある、手を伸ばせば届く低い天井の部
屋で、自由を信じる愚か者である私たち、フェリシテ・ド・ラムネーとフ
ランソワ・ド・シャトーブリアンが深刻なことがらについて話し合う。彼
は論争をするのだが、彼の思想は宗教の鑄型に流し込まれている。彼の思

73) モリエールの喜劇『タルテュフあるいはペテン師』（1664年）の主人公。

74) アルマン・カレル（1800-1836）はフランスのジャーナリスト。サン＝シール陸軍士官学校を卒業して軍人となるが、1823年スペイン戦役が勃発すると、スペインの共和派を支援する外国人部隊に加わるためフランス軍を退役する。帰国後はオーギュスタン・ティエリの秘書となり、1830年にはティエリ、ミニエとともに共和主義的論調の新聞『ナショナル』を創刊する。1834年に『ラ・プレス』紙の創刊者、エミール・ド・ジラルダンとの決闘で落命する。カレルは共和派であり、シャトーブリアンは王党派であるが、その政治的立場を越えて、彼らのあいだには友情関係があり、『墓の彼方からの回想』では第四二巻第四章全体がカレルの肖像に当てられている。

想の形は相変わらずキリスト教的なのだが、彼の思想の内容は正統の教理からこれ以上ないほど遠く外れてしまった。彼の言葉は、天からやってくる物音を捉えたのだ。

異端を説く信者である『無関心についての試論』の著者⁷⁵⁾は、私と同じような話し方をするのだが、彼が説く思想はもはや私の思想ではない。もし民衆に対して福音を説く道を進んだ後にも彼が聖職にとどまり続けたとしたなら、彼は権威を保ち続けただろうが、彼の立場が変化したことによってそうした権威は失われてしまった。村の司祭たち、僧職に新たに就いた者たち（しかもそうした聖職者たちの中でもっともすぐれた者たち）が彼を支持していたのだから、もし彼が聖ペテロの後継者⁷⁶⁾を尊崇しつつ、また教会の一体性を擁護しつつ、フランス教会の自由を支持していたなら、司教たちも彼が説く大義を支持していたことだろう。

フランスでは、若者たちがこの宣教師を取り囲んでいたことだろう。若者たちは彼のうちに自分たちが愛する思想、自分たちが願う進歩を見い出していたのだ。ヨーロッパでは、注意深い教会離脱者たちも彼の邪魔はしなかったことだろう。カトリックの強大な諸国民、ポーランド人、アイルランド人、スペイン人はこの新たに現れた説教師を祝福したことだろう。ローマさえも、最後には、この新たな福音者が教会の支配を再生させつつあったこと、抑圧された教皇に絶対君主たちの影響に対抗する方法を与えていることに、気づいていたことだろう。何という力強い生命力であることか。知性、宗教、自由がただひとりの司祭のうちに体现されていたのだ。

だが事態がそのようになることを神は望まれなかった。自身が光だった人物に、突然光明が不足したのだ。導き手は姿を隠し、信者の群れを暗闇

75) ラムネー。

76) ローマ教皇。

に取り残した。この私の同郷人の公の経歴は頓挫してしまったが⁷⁷⁾、私的人間としての優越性は相変わらず彼のものだし、彼が生来持っている才能の卓越性は揺るがない。年齢順を考えれば、彼は私より先まで生き延びるはずである⁷⁸⁾。私は、ひとが二度とは通ることのない死という扉の前で、私たちふたりでおおいに論争するために、自分の死に際に彼を呼び出そう。かつて彼の手が私の頭の上を下す権能を持っていた許しを、彼の天才が私の上に広げてくれるのを私は見たい。私たちふたりは、出生時、同じ波に揺られていた。永遠のことがらが見い出される同じ岸辺で、宗教と和解決したこの友との再びの出会いを願うことが、私の熱意あふれる信仰と、私の心からなる賞賛に許されんことを！

第一六章

キリスト教の思想こそ世界の未来である

結局のところ、私の探索によって得られた結論は次のようなものである。古い社会は自分自身の重みの下に沈み込む。自然な発展を遂げ、同時に純粹に共和主義的な思想、変更を加えられた王政主義的な思想を満足させるような未来を理解することはキリスト教徒でない者にとっては不可能である。いかなる仮定をしてみても、あなた方が願うような改良は、福音書からしか引き出しえない。

現今見られるさまざまな党派の主張の根底に見られるものは、つねに変わらず福音書からの盗用、福音書の戯画であり、どこに行っても見い出さ

77) ローマ教皇による破門。

78) ラムネーは 1854 年に死んでいるので、この文章を生前に読んだ可能性はある。(JCB)

れるのは使徒が説いた原理である。この原理はすっかりわれわれの内に入り込んでいるので、われわれはそれを自分たちに属するものとして使っている。実際はそうではないのに、われわれはその原理が自分にとってまったく自然なものだと思い込む。われわれの古くからの信仰を、われわれ自身より二、三段上位にあるものと考えさせるのも、われわれの古くからの信仰である。自らの同類たちを完全なものにしようとする独立心に富む精神の持ち主も、人間の息子すなわちキリストによって諸国民の権利が定礎されていなかったとしたなら、そんなことは考えてもみなかったことだろう。われわれが身を委ねる人間愛の行為、われわれが人類の利益のために夢想するあらゆる思考は、裏返しにされたキリスト教の思想に他ならない。それが単に名前を変えられ、様相を変えられているに過ぎないのだ。つねにそれは神の言葉が化肉したものなのだ。

あなた方は、キリスト教思想は進歩を遂げつつある人間的思想に過ぎないと言い張るだろうか。そのことは認めてもかまわない。だが、さまざまな宇宙論を参照してみるがいい。そうすれば、地上には啓示宗教としてのキリスト教に先立って、伝統的なキリスト教が存在していたことがわかるだろう。もし救世主が「到来しなかった」なら、そして彼が人類に向かって「まったく語りかけなかった」なら、救世主御自身が自分について言われるように、こうした思考ははっきりとした形では現れず、さまざまな真実は相変わらず、古代人が書いたものにおいて見られるのと同様に混乱したものであり続けたことだろう。だから、あなた方がこうした事態をどのように解釈なさろうと、あなた方があらゆるものを受け取ったのは啓示者、すなわちキリストからなのである。あなた方はつねに、「救済者 Salvatore」から、「慰みを与える者 Paracletus」から出発せねばならないのだ。あなた方は、彼から文明の、そして哲学の芽を受け取ったのである。

だから、未来にとっての解決を私がキリスト教のうちに、そしてカト

リックのキリスト教のうちのみ見ていることがあなた方にはわかるだろう。神の御言葉の宗教は、真実の現れであり、万物の創造は神が目に見えるものとなることである。世界の全般的な更新が必ず起きるはずだと私は言い張ろうとしているのではない。というのも、破滅を運命づけられている諸民族もあることを私は認めているからだ。また私は信仰が干からびつつある国もあることを認めている。だがもし一粒の麦が残されており、それがたとえ花瓶のかけらに過ぎないようなわずかな土地に落ちたとしてもこの種は芽吹き、カトリックの精神の新たな受肉が社会を活気づけることだろう。

キリスト教は、神についての、そして万物の創造についての、もっとも哲学的でもっとも理性的な評価である。キリスト教は宇宙の三つの大法則をそのうちに蔵している。神の法則、道徳の法則、政治の法則である。神の法則とは、三位からなる神の唯一性のことであり、道徳的法則とは「慈善」であり、政治的な法則はすなわち「自由」、「平等」、「友愛」である。

最初のふたつの法則は十分に展開されてきたが、三つ目の政治的法則は、これが完全なものなるために必要なものを備えるにはまだまったく至っていない。なぜなら、この法則は、無限の者についての知性に満ちた信仰と遍く認められる道徳が堅固に打ち立てられない限り花開かないからだ。ところが、キリスト教は最初に、偶像崇拜と奴隷制度が人間世界に満ちた馬鹿げた考えや、おぞましいものどもを掃き清めねばならなかったのである。

啓蒙された人々は、私のようなカトリック教徒が、彼らが廢墟と呼ぶものの陰に何としても腰かけたがるのを理解できない。こうした人々によれば、それは向こう見ずな振る舞いであり、偏見に基づいた振る舞いである。だがお願いだから私に言って欲しいのだが、あなた方が私に提案する個人主義的で哲学的な社会のどこに私は家族と、そして神を見い出せるだ

ろう。これについてあなた方が私に教えることができるならば、私はあなた方の意見に従おう。もしそうできないなら、私がキリストの墓のうちに身を横たえるのをそれほどひどいことと見なさないで欲しい。それはあなた方が私を見放した結果、私に残された唯一の隠れ家なのだ。

いいや、私は決して向こう見ずな振る舞いに及んだわけではない。私は心底真面目に言っている。私に起きたことはこうだ。人々が追い求めるあらゆることがらについて、私が立てた数多くの計画、私の学習、私の経験から、誤りをもたらさぬものはただひとつしか残らなかった。私の宗教的確信が、徐々に大きくなり、自分が持っていた他のあらゆる確信を飲み込んでしまった。天の下のこの世界には、私以上に、疑い深くせに熱烈な信仰を持っているキリスト教徒はいない。解放者の宗教であるキリスト教は、その終着点にたどり着くどころか、ようやくその第三段階に入りかけているに過ぎない。その第三段階とは「自由」、「平等」、「友愛」が現れる政治的段階である。解放の宣告である福音書をまだ読んでいないひとがいる。私たちはまだキリストによって告げられていた呪詛の言葉の段階にある。「人間が担えないような重荷を人間に背負わせ、指の先によってでも人間に触れたがらない者どもは呪われよ！」⁷⁹⁾

キリスト教はその教理においては安定したものだが、それが発する光には変動がある。キリスト教の変貌は、宇宙の全般的な変貌を包含したものである。キリスト教がその最高点に達したときには、暗闇は遍く照らし出されることになるだろう。救世主の磔刑像に磔にされた自由は、そこから救世主とともに降りてくるだろう。自由は諸国民に、それまではその諸条項が現実になることが妨げられていた、彼らのために書かれた新たな聖書を与えるだろう。諸政府は消え失せ、道徳的悪はなくなるだろう。万物がしかるべき姿に戻り、そのことが楽園失墜から生じた、死と抑圧の何十世

79) 「ルカによる福音書」、XI、46。(JCB)

紀が終わることの告知となるだろう。

この待望の日はいつやってくるのだろうか。社会は、正しきものを生み出す法則に則った秘密の方法に基づいて、いつになったら再構成されるのだろうか。誰もこの問いには答えられない。こうした動きに抵抗する人々の情念の力を誰も推し量ることができないからだ。

一度ならず、死が諸種族のいずれかを麻痺状態に陥れ、夜の中に雪が戦車の音を消すように、諸事件の上に静寂を拡げるだろう。個人が諸国民を構成するのだが、諸国民は個人ほど速やかには成長しないし、また個人ほど速やかに姿を消すこともない。追い求められるひとつのことがらに到達するのに、いったいどれほどの時間が必要なことだろう。後期ローマ帝国⁸⁰⁾の断末魔は終わることがないと思われた。キリスト教はすでにかなり広がっていたが、それは隷属状態を終わらせるに十分ではなかった。こうした計算の仕方がフランス人の気質には合わないのを私は知っている。わが国で起きた革命の際、われわれフランス人は時間という要素の存在を決して認めようとしなかった。これが、自分たちが今か今かと待ち望んでいた結果とは反対の結果が生じるのを見ていつもわれわれが呆然とさせられる理由である。高邁な勇氣に満たされて、若者たちは先を急ぎたがる。彼らは頭を下げて、自分たちが垣間見た、そして自分たちが到達しようと努力する高い地点へ向けて前進する。これ以上に称賛に値することはない。だが、彼らは自分たちの生命力をこうした努力のうちに使い果たしてしまう。期待外れが続いた末に、自分たちの努力の最果てにたどり着いた彼らは、失望に終わった歳月の重みを、もはや醒めた感情しか持てない次の世代に伝え、その世代が今度はその重みを次の墓まで運んでいく。こうして次から次へと諸世代が続いていくのだ。荒地の時代が再びやってきた。キ

80) ディオクレティアヌスのローマ皇帝即位（284）から西ローマ帝国に関しては帝国の滅亡（486）までの時期を指す。

リスト教はテバイス⁸¹⁾の不毛のうちに、人間が自身を偶像とする恐るべき偶像崇拜のうちに、活動を再開する。

歴史には、二種類の結果が存在する。ひとつはたちどころに現れる結果であり、それがどんなものであるかが即座に知られる結果である。もうひとつはその時点からは遠く離れた時点で初めて現れる結果であり、当初は人々には見えない結果である。この二種類の結果は往々にして互いに矛盾する。一方の結果はわれわれの短慮がもたらすものであり、他方のものは持続する智慧がもたらすものである。摂理に適うできごとは、人間が引き起こすできごとの後からやってくる。神は人間の後ろで立ち上がるのだ。あなた方の望む限り、神が与える究極の忠言を否定なさるがいい。神の御^み業^{わざ}に異議を唱え、言葉の枝葉末節にこだわり、庶民が摂理と呼ぶものを、やむをえないことのみゆき、あるいは理性とお呼びになったらいい。すでに起きてしまったことの終焉を見つめたらいい。そうすれば、どの場合でも、道徳、正義に基づいていない場合に生み出されるのが、人々が待ち望んでいたものとは逆のものであることがおわかりになるだろう。

天はまだ最終的な判決を発してはいないし、もし未来というものがあらねばならず、それが強力な自由なものであるとするなら、その未来はまだまだ到来することはないだろうし、目に見える水平線の彼方にしかない。そこに到達するには、キリスト教がもたらす期待の力を借りるしかない。その期待が有する翼は、あらゆるものがその期待を裏切るように見えるにつれて、ますます強力になる。この期待は時間よりさらに長続きするものであり、不幸よりさらに力強い。

81) アビドスからアスワンまでの上エジプトのもっとも南の古代エジプトの地方名。ローマ時代にはテバイス属州が置かれ、砂漠になって以後、五世紀頃、テバイスは多数のキリスト教隠者の隠退所になった。

第一七章

わが人生を振り返る

私の遺灰によって生み出され、私の遺灰に捧げられるこの作品は、私の死後も残るだろうか。私が質の悪いものを書いてしまったということはない。出版されるや否や、この『回想録』は忘れられてしまうかもしれない。そうだったとしても、もはや誰にも相手にされず、何をしてもよいかわからぬ生涯最後の無聊の日々の退屈を、私が自分に語りかけたことどもが紛らせてくれるのに役立ったということになるだろう。人生の最後に待ち受けているのは苦い年齢である。もはや心を喜ばすものは何もない。なぜなら自分はもはや何にもふさわしい者ではないからだ。誰の役にも立たず、皆にとつての重荷で、最後の住まいのすぐ近くまでやってきた人間が、そこにたどりつくまであと一歩しかない。誰もいない海岸で夢見たところで何の役に立とう。未来にいったいどのような愛すべき影を見つけられるだろう。私の頭の上を飛んでいく雲にももはや何の関心もない。

ひとつの考えが浮かんできて、私を悩ます。私の良心は、自分が過ごしてきた日々が無垢なものだったかどうかについて安心できない。私は自分が盲目だったのではないか、自分の過ちについて甘かったのではないか恐れる。私が書くことは正義に適っているだろうか。道徳と慈善を自分は厳密に守っただろうか。私には他の人々のことを語る権利があったのだろうか。もしこの『回想録』が何らかの害毒を流しているとするなら、後悔してみたところで何の役に立つだろう。地上の人々から知られず、地上の人々から隠されているにせよ、その人生が神の祭壇にとって快いものだった人々よ！ あなた方のひと知られぬ美徳に栄あれ！

この知恵を欠いた、そして未来においては誰も気につけないだろう哀れ

な男は、彼の生き方が示す唯一の原理によって、苦悩をともした仲間たちに、キリストの美德に由来する神々しい影響を振るった。地上でもっとも美しい書物といえども、ヘロデ大王⁸²⁾が「彼らの犠牲に自分の血を混ぜた」あの殉教者たちのたったひとつのひと知れぬ行為ほどの価値はない。

あなた方は、私が誕生するのを見た。私の少年時代を、コンブールの城⁸³⁾で、自分が奇妙にも作り出した対象を私が偶像のように崇めるのを、私のヴェルサイユへのお目見えを、革命が現出させた最初の光景に私が立ち会うのを、あなた方は見た。新世界で私はワシントンに出会う。私は森の奥深く分け入っていく。難破が私を故郷ブルターニュの海岸に連れ戻す。そして兵士としての私の苦しみ、亡命者としての私の悲惨が到来する。フランスに戻った私は『キリスト教精髓』の著者となる。すっかり変わってしまった社会で、私は友を得るが、また友を失う。ボナパルトが私の歩みを止め、アンギャン公爵の血まみれの身体⁸⁴⁾とともに私の進む道に姿を見せる。私もまた立ち止まり、私はあの巨大な男をコルシカのその揺籠からセント＝ヘレナ島のその墓所まで導く⁸⁵⁾。私は王政復古に参画し、またその終焉を目撃する。

こうして、私は私生活も公の生活もふたつながらしっかり経験した。私

82) ヘロデ大王（紀元前 73 頃 - 紀元前 4 年、ユダヤ王紀元前 37 年 - 紀元前 4 年）はローマ帝国期のユダヤ人地域のユダヤ人の王で、猜疑心が強く、身内のものを多く殺害した。キリスト教の歴史では往々にして、キリストの生誕を恐れて、二歳以下の幼児をすべて殺害させようとしたと言われる。

83) シャトーブリアンの父が購入し、シャトーブリアンが少年時代を過ごした城。

84) ブルボン朝に連なる王族であったコンデ家のアンギャン公爵は、ナポレオン暗殺未遂への関与を疑われ、1804 年バーデン選帝侯国領からナポレオン配下の軍によって拉致され、形式的な裁判の後、ヴァンセンヌの城で銃殺される。当時ナポレオン政府に外交官として仕えていたシャトーブリアンはこの処刑が我慢できず職を辞している。

85) ナポレオンは 1769 年にコルシカ島に生まれ、1821 年に南大西洋にあるイギリス領の絶海の孤島セント＝ヘレナ島にイギリスによって幽閉されたままその生涯を終え、そこに葬られる。

は四度にわたり海を越えた。オリエントに太陽を追い、メンフィス、カルタゴ、スパルタ、アテネの遺跡をも見た。聖ペテロの墓で祈り、ゴルゴタの丘を崇めた。貧しいことも富んだことも、権力を握ったことも弱かったことも、幸福だったことも悲惨だったことも、行動の人間だったことも思索の人間だったこともあった私は、世紀の動きに関わったこともあれば、砂漠で思索に耽ったこともある。水夫たちの目が雲の合間に大地を見るように、あまたの幻想の合間に現実世界の生活が私の目に見えた。もろい絵画を守るニスのように、私が見た数々の夢の上に広がったそのような現実の数々のできごとは、消え失せることはない。それらは私の人生が過ぎてきた場所を示してくれるだろう。

自分の三つの経歴のそれぞれにおいて、私は自分にひとつずつ大事な目標を課した。旅行者としては、私は極地の世界の発見を切望した。文学者としては、私は信仰をその廢墟の上に立て直そうと試みた。政治家としては、私は諸国民に、穩健な王政を与え、ヨーロッパの中でフランスにふさわしい地位を与え直し、ウィーン条約がフランスから奪った力を取り戻そうと努力した。私は、少なくとも、われわれが持つべきさまざまな自由の中でも一等重要で他のすべての自由に匹敵するもの、すなわち出版の自由が得られるように助力した。神の次元にあっては宗教と自由、人間の次元にあっては名誉と栄光（これらは宗教と自由の人間的次元における現れである）が、私が自分の祖国のために願ったものである。

私が生きていた時代のフランス作家では、私だけが、自分が創り出した作品に似ている。旅行者であり、兵士であり、政論執筆者であり、大臣だった私は、森の中で森を歌い、船の上で大洋を描き、亡命のさなかに亡命を学び、宮廷、行政事務、議会において王侯、政治、法律を研究した。

ギリシャ、ローマの雄弁家たちは公のことがらに関わり、公のことがらと運命をともにした。中世末期、ルネッサンス期のイタリアとスペインで

は文学と美術の一流の天才たちは社会の動きに参画した。ダンテ、タッソー、カモンイス⁸⁶⁾、エルシッリヤ⁸⁷⁾、セルバンテスの人生は何と激しく美しいことか！ フランスでは、かつてはわれわれが謡う歌、われわれの物語は、われわれの巡礼や戦闘から由来したものだだったが、ルイ十四世の治世以来、わが国の作家たちは、社会から孤立することがあまりに多くなり、その才能が示すものは精神の表現ではあっても、彼らが生きた時代のできごとを表現するものではなくなってしまった。

幸運によってか、運命のしからしめるところか、私は、イロコイ族の掘立小屋に夜を過ごし、またアラブ人の天幕で夜を過ごした後に、そして未開人の弊衣を、マムルークの豪華な長衣をまとった後に、王侯たちのテーブルに列し、その後貧窮に立ち戻った。私は戦争の勃発、和平の締結に関わった。数々の条約、議定書に署名した。数々の包囲戦、国際会議、教皇選挙に立ち会った。さらにはいくつもの玉座が再興され、失墜するのにも立ち会った。私は何がしか歴史を作り出し、歴史を書くことができた。私の孤独で沈黙に満ちた生活は、私の想像力が生み出したアタラ、アメリー、ブランカ、ヴェレダ⁸⁸⁾といった娘たちとともに喧騒のうちで送られた。そして、私が人生の過程で出会った数々のできごととも呼べるだろうものが、それ自身、夢が生み出した魅惑でなければ、それらについては言うまでもないだろう。ある古代の哲学者が聖なる病と呼んだ種類の魂を自分が持っていたのではないかと私は恐れる。

ふたつの川のあいだでのように、私が自分に出会ったのは、ふたつの世紀のあいだにおいてだった。私はふたつの川の濁った水に身を浸し、自分が生まれた古い岸辺から悔恨の念を抱きながら遠ざかり、希望をもって見

86) ルイス・デ・カモンイス（1524頃-1580）はポルトガルの詩人。

87) アロンソ・デ・エルシリヤ（1533-1594）はスペインの詩人。

88) それぞれシャトープリアンの作品である『アタラ』、『ルネ』、『最後のアベンスラージュ族』、『殉教者たち』の女性登場人物。

知らぬ岸辺を目指して泳いだ。

第一八章

私の人生のあいだに地球に起きた数々の変化の要約

わが国の古い習慣が保持していた言い回しに従って言うなら、「私が自分の寝台の天蓋を見ることができるようになって」以来、全地球の地理はすっかり変わってしまった。私が自分の人生の始まりのときの地球と、人生の終わりに見る地球を比べてみると、そのふたつが同じものとはとても思えない。地球上の全陸地の五分の一の大きさを持つオーストラリアが発見され、この大陸にもひとが住みついた⁸⁹⁾。フランスの帆船によって、第六の大陸が南極の氷の中に見つけられたばかりだ。われわれが住む北半球においては、パリ、ロス、フランクリン⁹⁰⁾といった人々が、北限においてアメリカ大陸の海岸線を画す岸辺を回りきった。アフリカはその神秘的な孤独を人々に開示した。もはや、われわれが住むこの星には人間に知られていない場所はひとつもない。世界をいくつもの互いに隔てられた部分に分けている諸言語も攻略される。まもなく多くの船がパナマ地峡、スエズ

89) オーストラリアは1606年にオランダの探検隊によって発見され、1770年にはイギリスがオーストラリアの東半分の領有権を主張した。

90) アメリカ大陸の北方を大西洋から太平洋へと抜ける航路を見つけたいというのは、そもそも青年期のシャトープリアンがアメリカに赴いたときに抱いていた願望だったが、彼にはそれをなし遂げるための準備が不十分であり、それはアメリカに着いて早々に断念せざるをえなかった。しかしそれゆえに、シャトープリアンはその後のこの地方の探検情報に一貫して関心を抱き続けた。ウィリアム・パリ（1790-1856）は1819年から1826年にかけて4度の北極地方遠征をおこなっている。ジョン・フランクリン（1786-1847）は1825年から26年にかけて2度目の極地遠征をおこない、ジョン・ロス（1777-1856）は1818年にその最初の極地遠征をおこなった。（JCB）

地峡を横切るのが見られるようになるだろう。

これに並行して、歴史学もまた遠く遡る過去から数々の発見をした。聖なる諸言語は、これまで失われていたその語彙を読み解かれるままになった。ミズライム⁹¹⁾で見つかった花崗岩の上においてまで、シャンポリオンは象形文字を読み解いた。それらは砂漠の唇に押された印とも見えていたもので、その永遠の口の堅さの保障ともなっていたものなのだ⁹²⁾。数々の革命は、地図からポーランド、オランダ、ジェノヴァ、ヴェネチアを消してしまったが、新たな数々の共和国が、太平洋と大西洋の岸辺の一部を占めますように！ それらの国々では、完成された文明が、その土地が持つ精力に満ちた性質に助力できるだろう。蒸気船が大河を上流に遡り、かつては打ち勝ちがたい障害だったそれらの川は、今や人々を結ぶ容易な交通路になるだろう。かつてケンタッキーの荒地からアメリカ諸州が生まれ出るのが見られたように、それらの河の岸辺は村々、町々で覆い尽くされるだろう。入っていくことができないと見なされていたあれらの森を、馬も付けていない車両が高速で走り、すさまじい重量の荷物と何千もの旅行者を運んでいこう。あれらの川を、道を、船の建造のための材木が、鉦山がもたらす材木代を支払うために役立つ富とともに下ってくるだろう。そしてパナマ地峡の障害が打ち破られ多くの船がふたつの大洋のあいだを往来できるようになるだろう。

火に動力を借りる船は、大河を航行するにとどまらない。船は大洋を越える。距離は縮まる。海流、季節風、逆風、海上封鎖、港の閉鎖などは気にする必要がなくなる。新たな産業が生まれ出したこうした新たな小説から

91) ミズライムは「創世記」の登場人物で、ハムの息子であり、ノアの孫にあたる。古代ユダヤ人にとってはミズライムの国はエジプトを意味する。

92) (シャトーブリアンの注) Ch・ルノルマン氏はシャンポリオンの旅仲間であった学者だが、オペリスクの文法を保存した。それを現在、アンペール氏がテバイとメンフィスの遺跡に研究に行っている。

プランクエ⁹³⁾の茅屋までの距離は遠い。あの時代には、老婦人たちが自分の家がかつてのカード遊びをしていた。農民たちは、自分が着る服のための麻糸を紡いでいた。松脂の蠟燭のか細い炎が村の夜を照らしていた。化学はまだその数々の奇跡をなし遂げてはいなかった。機械が水と鉄を動かし毛織物を織り、絹刺繍を施すことなどなかった。大気現象にとどまっていたガスはいまだ、われわれの劇場や街路に照明を供給してくれてはいなかった。

こうした変化は、われわれが住む地上にとどまるものではなかった。自らの不死性の本能に衝き動かされ、人間はその知性を天にも遣わした。天空に一步を進める毎に、人間はいわく言いがたい力がなし遂げた数々の奇跡に出会った。われわれの祖先にはたったひとつの星と見えていたものが、実はふたつ、あるいは三つの星が重なりひとつの星と見えていたのだった。宇宙のうちには数多の太陽があり、それらの太陽は互いが互いを隠し、その数があまりに多いので宇宙ひとつでは空間が足りなく思えるほどだ。無限の中心で、神はご自分の周りに、こうした壮大な理論の数々が行進しているのを見ている。それらの理論は、至高の存在の偉大さを示す数々の証拠に新たに付け加えられた証拠なのである。

大きく広がった科学に従って、多数の太陽が波となって漂う大海、この銀河、創造者の手が創り上げた光の原材料である諸世界が融解した金属の只中に漂う、われらの弱々しい惑星を思い描いてみよう。星々はあまりにも遠くにあるので、その輝きはそれを見る者の目には、光の発生源であるそれらの星々が燃え尽きたときにしか届かない。人間が動き回っている原子の上の人間は何と小さいことか。だが人間は知性として何と巨大なこと

93) プランクエはシャトープリアンの母方の祖母が住んでいた村であり、出生直後のシャトープリアンはこの村に里子に出されていた。祖母とその妹、そしてその隣人の老婦人たちの生活の様子は『墓の彼方からの回想』第一巻第四章に述べられている。

か。人間は星々の顔がいつ影に覆われるかを知っている。何千年もの後に彗星がいつ戻ってくるのかを知っている。人間はたった一瞬しか生きていけないのに！ 人間は、天の衣服の襞に埋もれた顕微鏡的な大きさしかない虫けらのような存在でしかないのに、広大な空間の中で、星々は、人間にその歩みの一歩たりとも隠すことはできないのだ。われわれにとっては新たな発見であるこうした星々は、この先どんな運命を照らし出していくのだろうか。こうした星々の存在がわれわれに明かされたことは、人類のどのような新たな段階に結びついているのだろうか。これから生まれ出ようとしている人々よ、あなた方はそれを知るだろう。それを知ることなく、私は身を引いていく。

人生の歳月がとてつもなく長引いたおかげで、私は自分の記念碑を完成できた。これは私にとって大きな慰めだ。私は誰かに押されているように感じていた。私の席が取ってあった船の船主は、乗船までもういっときしかないと私に告げていた。もし私がローマの主人だったなら、スッラ⁹⁴⁾と同じように、自分の『回想録』を死の前夜に書き終えると言っているだろう⁹⁵⁾。だが、私は彼がしたようには、自分の物語の結語として次のような言葉を置きはしないだろう。「私は夢でわが子のひとりが私に彼女の母であるメテッラ⁹⁶⁾を指さしながら、永遠の幸福の懐のうちで休息を楽しみに来るように勧めるのを見た」。もし私がスッラだったとしても、栄光は私に決して休息と幸福を与えることはできなかつただろう。

新たな嵐が起きるだろう。われわれが苦しんだ困難以上の厄災がやって

94) ルキウス・コルネリウス・スッラ・フェリクス（紀元前138-紀元前78）は共和制ローマ期の軍人・政治家。

95) ここでシャトープリアンが参照しているのはプルタルコス『対比列伝』だが、シャトープリアンはプルタルコスが用いていた間接語法を直接語法に書き直している。（JCB）

96) スッラの後妻。

くるのではないかと予感されている。すでに、戦場に戻るために、古傷を手当てしようと人々は考え始めている。だが、私は近々に新たな不幸が到来するとは思っていない。民衆も、国王たちも、どちらも勢いが衰えた。予測できない混乱がフランスに襲いかかりはしないだろう。私が死んだ後に起きることは、地球全体の変化の結果でしかないだろう。おそらく世界は、苦痛に満ちた停滞状態に入りつつあるのだ。痛みを伴わずに世界の表面が変化することはないだろう。だが、今度大きな変化が起こるとすれば、それは個別のいくつもの革命ではなく、大破局を招く地球規模の革命だろう。明日起きるさまざまなきごととはもはや私には関わりはない。それらには別の画家が呼び出される。皆さん、今度はあなた方の番です。

一八四一年十一月一六日、この最後の言葉を私が書きつけている今、西側で国外宣教師館の庭園に面している私の部屋の窓は開かれている。今は朝の六時で、蒼白い大きな月が見える。月は東からの最初の金色の光に微かに光るアンヴァリッド⁹⁷⁾の尖塔の上に落ちかけている。まるで古い世界が終焉を迎え、新たな世界が始まっているかのようだ。私は、もはや自分が見ることがないだろう昇ってくる太陽による夜明けの反映を見ている。もはや私がなすべきことは、自分の墓穴の傍らに座ることしかない。それから私は、十字架を手にして、大胆に永遠の中へと下っていくだろう。

97) ルイ十四世が、負傷兵のために建築した施設で、現在もパリ、セーヌ河畔に現存しており、1840年11月にはセント＝ヘレナ島から持ち帰られたナポレオンの遺骸がアンヴァリッドに収められており、『墓の彼方からの回想』のこの部分をシャトープリアンが書いている時点では、すでにアンヴァリッドはナポレオンの墓所となっている。